

# BOOK TRAIN

ブックトレイン

千代田図書館  
学校支援担当発行  
冬の図書だより  
2016  
中学生版

中学生の皆さんにおすすめの本を紹介します。



のマークは気軽に読める本、



のマークは読みごたえのある本です。



## アラスカの小さな家族 バラードクリークのポー



カークパトリック・ヒル／著 レウィン・ファム／絵 田中奈津子／訳 講談社

1920年代後半のアラスカに暮らす、あたたかい「家族」の物語。

ポーには父さんがふたりいます。母さんはいません。そのあと弟もできました…。

ゴールドラッシュ後のアラスカ・バラードクリークを舞台に、5歳の少女・ポーの暮らしを描いた28編の素朴な物語。血のつながらないふたりの父さんと町の人たちに愛され、のびのびと成長する天真爛漫なポー。様々な人種の人々が仲良く、そしてたくましく生きていた、当時のアラスカの生活も興味深い。



## おいぼれミック



バリ・ライ／著者 岡本さゆり／訳者 あすなろ書房

嫌いな相手のこと、どれだけ知っていますか？

15歳の少年ハーヴェイはイギリスに住んでいるインド系移民で、シク教徒。ほとんどの人とは仲良くやっている。隣の家のミックを除いては…。ハーヴェイは、移民だからという理由でミックからいちゃもんをつけられ、嫌がらせを受ける。しかしいつもひとりである彼のことがどうしても気になる。どうにか仲良くなれないかと奮闘する毎日の中で、あることをきっかけにミックの秘密を知ることになり…。



## ぼくのオレンジの木



ジョゼ・マウロ・デ・ヴァスコンセーロス／著者 永田翼 松本乃里子／訳者 ポプラ社

どうしようもないことが、ぼくにはついてまわるらしい

早熟で、想像力豊かな5歳の少年ゼゼーを、周りの大人達はいつも悪者扱いする。引っ越し先のオレンジの木にだけは本音を語り、心の翼を広げるゼゼー。そんなある日、大金持ちの大人と友達になり、彼の未来が開けていくかに思えた。しかしその矢先に…。

ブラジルの国民的作家が、1920年頃を舞台に、雑多な暮らしの中で懸命に生きるゼゼーをみずみずしく描いた作品。





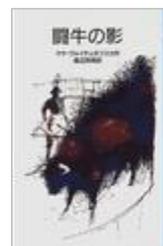
## 闘牛の影



マヤ・ヴォイチェホフスカ／作 渡辺茂男／訳 岩波書店

スペインのその町には英雄と呼ばれた伝説の闘牛士がいた

ファン・オリバルは町の人々にとって、伝説の闘牛士として英雄であった。そして皆、その息子もそうなるであろうと信じて疑わなかった。ただ1人、当人であるマノロ以外は…。マノロは自分の臆病さを知っていて、闘牛士になどなれるわけがないと思っていた。しかし、町の人々の期待を裏切ることはできない。12歳の少年を責め立てる期待と現実…。本当の勇気とはなんなのだろうか？



## ビーバー族のしるし



エリザベス・ジョージ・スピア／著者 こだまともこ／訳者 あすなろ書房

民族や文化の違いを認めあうのに、必要なものとは？

マットはもうすぐ13歳。北米先住民の暮らす森に、父さんとやってきた。暮らしの準備を整え、父さんは母さん達を迎えに行く。その日から短くても7週間を、マットは一人で森の小屋で暮らすのだ。ある日、ハチに襲われ飛び込んだ池でおぼれかけたところを、先住民の老人に救われる。それをきっかけに、老人の孫エイティアンに英語を教える事になったが、彼は白人であるマットを軽蔑した目で見るのだった。白人と先住民少年の友情の物語。



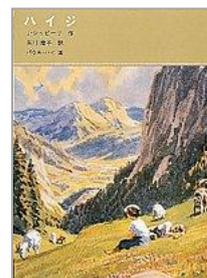
## ハイジ



J・シュペーリ／作 矢川澄子／訳 パウル・ハイ／画 福音館書店

いつまでも大切にしたい、そんな至極の物語

中学生にハイジなんて子どもっぽいと思っているあなたに！ ぜひこの作品を読んでほしい。アルプスのすばらしい自然、アルムじいさんの哲学的な言葉、クララのおばあさまのすべてを包み込むようなやさしさに感動して泣いてしまうかも。それもすべては、ハイジのまっすぐな心、まわりの人をも巻き込む明るさがそうさせている。上等な挿絵も含めて、すみずみまで味わってほしい一冊。



## ソルビム-お正月の晴れ着-



ペ・ヒョンジュ／絵と文 ビョン・キジャ／訳 らんか社(旧セーラー出版)

新年のご挨拶は、とびきりのおしゃれをして

韓国の民族衣装といえば女性の「チマ・チョゴリ」と男性の「パジ・チョゴリ」。その中でも、お正月のために新調されたものをソルビムと言う。元日の朝、新年の挨拶に出かけるためにおしゃれをする女の子の着方ひとつひとつからソルビムがどれだけ特別なものかが伝わってくる。可愛らしく華麗な絵で、お隣の国の新年の華やかさを表現した絵本。

